

1994.09 黒部丸山 南東壁

1994年9月22日～25日

メンバー：TS、MN 他計12名

22日、21時03分発の急行「ちくま」は思いの外乗客が多い、ホームの行列の中ほどには市川山岳会と合同で黒部下の廊下へ行くTさんUさん二人の姿も見える、行列の最後尾に並んだ私は列車の入り口の入るのが精一杯で通路にさえ立ち入る事が出来なかった、しばらくすると中から先に並んでいたMNさんが席を確保しているから入ってくるように合図を送ってくれるが、しばらくは入り口で身動きが取れずボーッとしたままだった、やっとの思いで席にたどり着くと大阪連盟メンバーは総勢12名、まずは前祝いの乾杯、夜行の人と相成る。

23日

松本駅で大糸線に乗り換え大町に近づく頃雨が降っている事に気付く、大町からタクシーに分乗して扇沢へ、連休で観光客も相当数の為始発を繰り上げたトロリーバスは6時30分に発車する。

黒四ダムからはそれぞれのパーティ毎に出発、この頃には天候も回復に向かい快適な登攀が望めそうだ。

黒部川の左岸の登山道はよく整備されている、ダム放流の警告サイレンが溪谷に設置されたスピーカーを介して知らせてくれる、紅葉には未だ早いのだが漆や楓がポツリポツリと緑の中に紅を添える、一時間程下り内蔵助谷出会い、黒部谷に別れを告げて立山方面を目指す、内蔵助谷右岸を半時間程で丸山ールンゼ押し出し着。

不用品をデポ、水を補給、登攀具を付け各々のルートに向け出発

南東壁へは、HT、SN組とMN、私の2パーティが向かう、中央壁の下を回り込みールンゼを詰める、ルンゼがゴルジュとなり滝が現れる、この辺りが南東壁 塚田、小暮ルートの取付きらしいが判然としない、先行したHTパーティと検討するも（資料のルート図にも取付きは様々とある）やはり取付きは判然としないまま、先行パーティのSNが取付く（10時）

1P目 20m iv

私達はMNリードで（10時45分）カンテ状から草付きフェース、草付きの砂がフェース上に流れ出しやすい、先行パーティが打ち足したハーケン1本を回収して登る

2P目 45m iv+A1

私がリードに代わり 凹角からカンテ フレンズ使用 先行パーティのビレーポイントが不安定のようなので、それより少し上のテラス迄ザイルを延ばすが2 m足りない（私のザイルは 40m、MS のザイルは 45m）シュリングを使って何とかビレー工作を試みるもやはり足りないハーケンを打とうにも適当ナリス無し、やむなく 40mザイルをフリーにしてもらいようやくビレー点に立つ。



3P目 10m IV+ A1

MN リード クラックを A1 からフリーでぬける

4P目 35m A1

私リード いよいよ大スラブ、ボルトが延々と続くボルト間隔は短いものの、RCC ボルトの殆ど（7割位）リング部が跳んでしまっている、出だし幾本かはボル

トの頭にリング代わりに巻き付けた 3mm をフォローの為に残置して、アブミを架け替えて登っていたがすぐに手持ちの（10 本）3mm シュリングが足りなくなってしまうので回収しながら登る事にする、ランニングビレーも出来るだけ節約する。

3mm シュリングを巻付けたリ回収したりで時間はかかるが、豪快で快適な登攀が楽しめる、アブミビレー

5P目 30m A1

MN トップ レッジが狭いので休憩もなくビレーの TS をかわしてそのままトップに立ち大ハング基部を目指してアブミを架け替えて行く、やはり 5P 目も大半のボルトのリングは跳んでいる、5 P 終了点のビレーポイントのレッジは狭くその上先行パーティのフォローがトップをビレーしていて二人は立てない、時間節約の為中島はその下でアブミビレー、私を迎え入れた後、先行パーティの空いた少し上のレッジにビレー点を移動する

6P 目 35m A1

私リード 頭上のハング下をアブミの架け替えで左へと回り込みフェースを直上、涸れた松ノ木（径 10 cm）に到達、先行パーティの無線が後 10m 延ばせると知らせてくれる、そのまま上のかぶり気味のカンテまで登りカンテから左 5m のいやらしいトラバースでこのピッチを切る。

夕闇が迫る中登り始めたフォローの MN が完全に闇の壁と仮した頃から極端に登攀スピードが鈍る、無線を飛ばすと驚いた事にヘッドランプのカバーが開いて電池が落ちてしまい手探りでボルトを探しているとの事、人工ルートでフォローとはいえランニングビレーを節約している上、殆どのボルトのリングが跳んでしまっているのでアブミ支点にするボルトを探すのは困難極まりない事は容易に予想できる、私の立っているビレー点は壁の側面を回り込んでいるので、セルフビレーを 5m 延ばし先程越えてきたカンテのところまで戻り、上から MN を照らすはまだ遠い為ぼんやりと明るいただけだと言う、それでも何とか涸れた松まで登りやっと明かりが届くようになりカンテで迎え入れ、再び元のビレー点へ戻る、長いピッチでルートが折れ曲がりお互いが確認できない死角だった為安定地にたどり着きホットする。

危険な闇の登攀を止めて安定地でのビバークを考えたが、先行パーティが後 25m の大テラスへ既に到達、私達の為に残るピッチにはランニングを全て残置してくれたので無線の誘導で大テラスまで登る事にする。

7P 目 10m A1

私リード 先行パーティの残置ランニングをルートの日印にアブミの架け替えで垂壁を 10m でしっかりした松の木へ、ヘッドランプを照らして MN を迎え入れる。

8P 15m A1 iv

私リード 松の木から右へ垂壁を 4m アブミトラバースここも先行パーティの残置に助けられる、さらに大きなカン iv 級を回り込みやっと大テラスへ、フォローの MN は再び闇の中を登攀する事になる、先着の HT、SN がカンテヘライトを向けて照らしてくれる、ようやく明かりの中に MN の姿が見え到着 20 時 30 分、苦しい登攀だった。

緩い傾斜はあるものの広いテラスが二つあるここが本日のビバーク地になる、早速ザイルをフィックスして身体とザックを固定、食事を作りながら今日の無事に感謝してビールで乾杯、一段上のテラスに陣取った先行パーティの二人が先に出来上がったにゅう麺を差し入れてくれる、闇の中で緊張した私達の身体と心を、彼らの優しさがにゅう麺の温かさを通してほぐしてくれる 感謝。

他のルートを登っていた大阪の仲間は既に全パーティ共ビバークに入ったとの事、私達も

食事を終えツエルトを被るすぐに寝入ったものの気が付けば身体がずり落ちザイルに吊られている、少し這い上がってはザイルの張りを緩めては、又、吊られが朝まで繰り返される。

24 日 5 時起床 小雨がぱらつくが直ぐに上がる

9P 目 20 A1 iv+

私リード ビバーク地の緩傾斜帯から 4 m の凹角を A 1 で出口はホールドが無くフリーで何とか抜け出すがいやらしい出だしだった。

10P 目 10m iv

MN リード このピッチからは先行パーティ[^]の HT は、塚田、小暮ルートから左岩稜ルートに継ぎ丸山完登を目指すという構想だったとの事、色々資料を探してもこの二つのルートを継いだ記録はなかったそうだが、10 数年前彼が左岩稜ルートと登った時に間違えて左により過ぎた時いつかこの二つを継なげられるのではないかとの思いが今回の計画の発端となったが、果たして継げられるかどうかは未知数である、最悪昨日までのルートを懸垂下降もありうる

左岩稜よりカンテ目指して右上、カンテを越えて大きく左上しテラスへ。

11P 目 30m III

私リード ブッシュから大きな洞穴のあるバンドへ、どうやらこのバンドをたどれば左岩稜へ出られそうだが、HT はこれで継げたと安堵の色を覗かせた、彼の勝利の瞬間だった。

12P 目 40m I

私リード ブッシュの中のバンドトラバースで左岩稜ルートに合流、左岩稜ルートを登って来ていた T 労山の S と M 二人パーティのリードがビレーしているところに合流、これで私達も完全に左岩稜に出られた。



このルートには既に大阪の 4 パーティが先行している、私達が最後のパーティとなる、やがてブランコのテラスと称するところになる、恐らく初登の時に支点工作の踏み台にしたものと思われる 30cm 四方の板が細引きで立ち木に括り付けられている、10 数年前にもあつ

たという、今は朽ちてはいるものの未だブランコの形状を保っている。

私は左岩稜に合流してほぼ終了点に近いと思い込んでいたが、1/3 がまだ残っているとの事、少しがっかりしながらも、とにかく先行パーティについていく。

13P 目 40m A1 III

Mn リード ブランコのところから A 1 で 7～8 m 左上、後は木の根っことブッシュ登り傾斜の落ちたところで倒木を越え立ち木でビレー

14P 30m II

Mn リード 狭いバンドをトラバースした先に 7m のチムニー、先行の T パーティのトップがザイルで釣り上げたザックをチムニーに挟まれ、上げたり降ろしたりの大奮闘、腕がだるいやろーな もっと右に振って引き上げろと こちらは高見の（下見？）見物がてら休憩。

15P 20m III

私リード 身体がスッポリ入る完全なチムニー、狭いのでザックを降ろしてバックアンドフットで身体をずり上げ出口は身体一つがやっこさの岩穴、抜け出たテラスの立ち木でビレー、ザイル 1 本を外し先ず二人分のザックを引き上げ、これが結構重くてしんどい。

16P 目 30m II

MN リード 全くのブッシュでルートが分かりにくい、大阪の先行者が 10 人も通ったばかりなのに踏み後さえ判然としない、先々行パーティの HT、SN に無線で誘導してもらう、頻繁に交信が行なわれる。

17P 目 40m II

相変わらずブッシュに先行パーティが所々に紙テープで目印を残してくれたので大いに助かる。

18P 目 40m iv A1

私リード 無線の案内で最終ピッチだと伝えてくれる、フェースを 2m 程登り左へトラバース次のボルトが遠い、中間では木をつかみ最後のビレー点にはアブミで到達、パートナー MN 迎え入れて終了 14 時 20 分。

コンテで 10 分登った安定地には、10 人の仲間が笑顔で待っていてくれた、一息入れて丸山頂上を目指す、全く踏み後もないブッシュこぎが延々と続くかのようなようだったが、やがて丸山頂上経て中央山稜より内蔵助平の方向を目指してブッシュの中を懸垂下降、このルートを幾度か経験のある Y のベテラン KN さんさえも下降ルートはいつも違うところを下ってしまうと云う程、下降のルートファインディングが難しいそうだ。

4 ピッチの懸垂で内蔵助平に注ぐ小沢に到達、沢伝いのブッシュを下降、雨の降り出した中 19 時 30 分内蔵助平の登山道へ飛出しほっとする、後はベースまで登山道をたどればよいはずだ。

時折、昼間の明るさになるほどの雷雨の中、長い道のりを重い体を引きずるように下る、やがて闇の中に明かりが見える、先着した人が宴会用の雨除けシートを広げているところだった、ベース帰着 20 時 30 分。

全員で今山行の無事と検討を湛えあって大宴会となる、昨夜は全員が岩場でのビバークで疲れただろうに登攀に満足したのかベースに帰って安心したのか皆嬉しそうな顔をしている、宴会を少し早め（いつもより）に切り上げ、疲れた身体にツエルトを被り泥のような眠りに就いた。

25 日（日）

5 時 寒さで目が覚める、MN は昨夜、妹達のテントに入れてもらい、私はザックの上に横になり支柱代わりに雨傘を広げその上にツエルトをかけて寝ていた、降り続いた雨で身体も何もかもがボトボトになっている、取敢えずコンロに点火して暖を採る。

やがて、そぞろ起き出し朝食の用意をする、昨日の宴会場では、今度は朝の小宴会が始まった中に交えてもらう。

9 時 30 分 昨夜からの雨も上がった頃、黒四ダム向けて出発する、道々茸を採取しながらのんびりと下る、黒四ダムから丸山を振り返り満足感を味わいながら全員で記念撮影して黒部の山々に別れを告げる。